

令和 3 年 8 月 17 日現在

機関番号：32418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00694

研究課題名(和文) 日本語多読支援システムの開発：多読のための語彙レベルテストサイトの構築

研究課題名(英文) Development of a support system for Japanese extensive reading: Constructing a vocabulary level test website

研究代表者

中野 てい子 (NAKANO, TEIKO)

尚美学園大学・その他部局等・非常勤講師

研究者番号：20635932

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：「さくら多読ラボ」で公開している日本語多読教材「JGRさくら」を使って多読を始める学習者が、どのレベルから読み始めればよいかを判定する「多読のための語彙レベルテスト」(以下、VLTとする)を開発し、オンラインで公開した。VLTの判定基準の妥当性は、調査によって明らかにした。これにより、学習者が自分に適したレベルを読むことで、「読み」の良い循環が生まれ、多読の効果が期待できるようになった。また、希望する学習者はVLTの結果を「さくら多読ラボ」の個人の学習履歴に登録できるようにした。多読授業の課題として行なった読書記録とアンケートの回答より、VLTの有用性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、日本語学習者の多読を促進することである。多読は、語彙力をつけ、読解力も向上させる有効な方法である。教師主導型の授業で行われる精読とは対照的に、時間と場所を選ばず、自由に読み物を選んで始めることができる。これまで、日本語多読教材を開発し、インターネットで公開することにより、日本語の教材を入手することが難しい海外の学習者や、教師の指導が受けられない学習者が多読を通して自律的に学ぶ機会を提供してきた。今回、VLTを開発・公開したことにより、独学の学習者が自分の語彙レベルに適した多読教材を選び、「読み」の良い循環において多読を行うことを可能にした。

研究成果の概要(英文)：This study developed a “Vocabulary Level Test for Extensive Reading” (hereafter, VLT) to judge the appropriate level of Japanese graded readers to start reading from. These graded readers are called “JGR SAKURA” and are released online on “SAKURA TADOKU LAB.” The validity of the judgement criteria was revealed by survey. This study helped learners to enter “the virtuous circle” of reading by knowing the appropriate level for them to read at. Moreover, learners can register their test results on their personal page of “SAKURA TADOKU LAB.” From the results of the book review sheets and questionnaire answered by those who took VLT and read “JGR SAKURA,” it was found that VLT was useful.

研究分野：日本語教育、教育工学

キーワード：多読 語彙レベルテスト 自律学習 e-learning 電子書籍

1. 研究開始当初の背景

多読は英語教育で用いられる学習法の一つであり、語彙力をつけ (Huckin & Coady 1999)、読解力も向上させる有効な方法であるとして行われている。特に、未知語との遭遇回数が多くなるように書かれている多読教材を用いた多読は、付随的語彙学習に効果がある(三上・原田 2011)。多読は学習者の言語能力の範囲内の読み物を、辞書なしで、通常より速い速度で、中断なく滑らかに読む (Day & Bamford 1998)、いわゆる、トップダウン式に内容を理解する読み方である。これに対して、多くの日本語教育における読解は精読を中心に授業が行われているため、日本語が上級レベルであってもトップダウン式の速読に慣れていない学生が多い。そのため、大学入学後にも多読の必要性が指摘されている (福本 2004、江田 2006)。しかし、既存のカリキュラムに多読を組み込む時間を取ることに難しさや、既存の読解授業との質的な隔たりから、多読授業の導入は容易でない。そこで、Day & Bamford (1998, 40-44) は、多読の導入方法として、独立した多読授業の他に、既存の読解授業の一部として、あるいは、授業外活動として行う方法を示している。Day & Bamford (1998) が言うように、教育機関で第二言語を学ぶ学習者が、教師による支援のない授業外活動として、対象言語の学習につながる多読が可能なのであれば、独学で学ぶ学習者も多読教材があれば、楽しみながら自らの語学力を確かめ、高めることができるだろう。e-ラーニングで多読を行うことができれば、多読授業を教室で行うことが難しいという問題の解決策にもなる。

しかし、Coady (1997) が Beginner's paradox というように、語彙が不足していれば、読み進めることができず、語彙は思うように増えない。Nuttall (2005) はこの状況を「読み」の悪循環と呼び、第二言語学習者の読書行動に良い循環が生まれると良い読者に成長すると言う。Nuttall (2005) の言う良い循環とは、読み物の内容がわかると、面白くなるので、読むスピードが速くなり、その結果読む量が増え、学習言語により多く触れられ、内容がさらにわかるようになるという循環である。Nuttall (2005) は、速さ、楽しみ、理解のうちのどれもが、悪循環から抜け出して良い循環に入るための鍵になると言う。このうち、速さと理解は、学習者の語彙レベルに関係するため、自分の語彙レベルに合うものを読むことが望ましい。

申請者は、国内外の日本語学習者が e-learning として学べる多読の学習システムの開発を目指し、「さくら多読ラボ」を開発し、公開している。一般的な授業で行われる精読とは対照的に、多読は時間と場所を選ばず、自由に読み物を選んで始めることができる。このサイトでは、教師の代わりとなる動画で多読という学習法を知り、自ら選んだ読み物を読み、コメントを書いて送り、他の読者のコメントを読むことができる。「さくら多読ラボ」のライブラリーで公開している「JGR さくら」は、日本語学習者の多読を支援するための読み物で、「JGR 語彙リスト」に基づいて 8 段階にレベル分けされている。「JGR さくら」を使って多読を始める学習者がどのレベルから読み始めればよいかを判定する「JGR 語彙レベルテスト」の開発も行なっている。これまで「JGR さくら」を使った授業で行ったアンケート調査においても、自分の語彙レベルに合ったものから読みたいという意見があった。独学で学ぶ学習者が多読を始める場合にも、良い循環で読み進めることができるよう、語彙レベルを自己診断するための語彙レベルテストが必要であると考えている。

2. 研究の目的

本研究では、「さくら多読ラボ」において、「JGR さくら」を使って日本語を学ぶ学習者が適切な語彙レベルを自己診断するための「多読のための語彙レベルテスト」(以下、VLT とする。)を開発・公開し、「読み」の良い循環で多読を行うことの支援を目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、VLT の開発、VLT の妥当性の評価、オンライン VLT の有用性の調査、という 3 つのアプローチを進めた。

(1) VLT の開発

VLT は、Nation (1990) の語彙レベルテストにならない、媒介語を使用せず、正解となる 3 語の意味を日本語で説明し、その説明にあてはまる語を 6 語の選択肢から選ぶ形式である。テスト問題は、「JGR 語彙リスト」から、品詞と語種の比率に応じた層化抽出法によって無作為に抽出した語で作成した。正解となる語 120 語、錯乱肢としての 120 語からなり、問題の総数は 40 問である。これを A と B の 2 バージョン作成し、ルビーン検定によってバージョン間の等価性を確認した。

(2) VLT の妥当性の評価

申請者が「JGR さくら」を使っている授業の履修者から被験者を募り、調査を行った。被験者は「JGR さくら」を読み、読書記録(読むのにかかった時間、難しさ、面白さ、未知語、辞書で調べた語)を書いている。被験者が VLT で判定されたレベルと、その前後のレベルの読み物を読んだ時の読書記録のデータから VLT の判定基準の妥当性を、速さ・難しさ・面白さ、文章理解から見た VLT による判定の妥当性の 2 つの点から分析した。

(3) VLT の必要性・有用性の調査

デジタル教材配信・閲覧システムを使い、学習者が教室外で行う多読における読書行動を調査した。閲覧ログから得られた情報と事前事後の語彙テストの結果を、覚えた語の量、覚えた語の質、「読み」の循環、という点から考察し、語彙レベルテストの必要性を事前に調査した。

有用性に関しては、2020年度のオンライン授業においてオンライン VLT と「さくら多読ラボ」を利用した多読を課題とし、アンケート調査の結果を分析した。

4. 研究成果

(1) VLT の妥当性の評価

「さくら多読ラボ」で提供している「JGR さくら」は、英語の Graded readers の理論に基づき、既知語カバー率 95%以上で制作されている。これに基づき、VLT の判定基準も 95%以上としている。しかし、この値は理論上のものであるため、既知語カバー率と語彙レベルテストの判定基準の間に開きがないかどうかは、実践を通して明らかにする必要がある。そこで、「JGR さくら」を使用している授業の履修者から被験者を募り、被験者が VLT で判定されたレベルとその前後のレベルの読み物を読んだ時の読書記録のデータから VLT の判定基準の妥当性を検討した。その結果、VLT の判定基準が概ね妥当であることが明らかになった。

(2) オンライン VLT の開発

VLT の判定基準の妥当性を確認した上で、オンライン上で公開した。オンラインで公開したオンライン VLT が紙ベースの VLT と異なる点は、Webb 他 (2017) の電子版語彙レベルテストに倣い、図 1 のように表形式で表示したことである。これにより、「JGR さくら」を利用する学習者が、読み始める前にオンライン VLT を受け、自分に適した「JGR さくら」のレベルを知ることができるようになった。このオンライン VLT のサイトを「さくら多読ラボ」と連携させ、希望する利用者がオンライン VLT の結果を「さくら多読ラボ」のマイページ(個人の学習履歴)に登録できるようにした。

	く 辞らす	しら 調べる	かか 頼む	に 通げる	まが 登る	はら 払う
お金を出す	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>
生活する	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
「お願いします」と言う	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

図 1 オンライン VLT の問題の例

(3) オンライン VLT の有用性の評価

事前に、デジタル教材配信・閲覧システムを用いて教室外の学習者の多読における読書行動を調査した。その結果、適切なレベルの読み物を読むことが、良い循環に移行するための条件の一つとなり得ることが示唆され、「JGR 語彙レベルテスト」の必要性が示された。

オンライン授業の課題としてオンライン VLT と「さくら多読ラボ」を使い、学習者の読書記録とアンケートの結果を分析した。アンケートでは、70%の学習者が、テストがあった方が良いと回答し、オンライン VLT の有用性が確認された。

上記の他、「さくら多読ラボ」のライブラリーを充実させるべく、新たな「JGR さくら」の作品を電子書籍化し、公開した。また、「さくら多読ラボ」の管理サイトに、ライブラリーに読み物の朗読をアップロードする機能を追加した。さらに、「JGR さくら」の語彙調整のために開発した「JGR 語彙レベルチェッカー」を「さくら多読ラボ」と同じサーバーに移動し、公開した。

引用文献

Coady, J. (1979) A psycholinguistic model of the ESL reader. In R. Mackay, B. Barkman, & R. R. Jordan (Eds.), Reading in a second language (pp. 5-12). Rowley, MA: Newbury House.

Day & Bamford (1998) Extensive reading in the second language classroom, Cambridge: Cambridge University press.

Huckin, T. & Coady, J. (1999) Incidental vocabulary acquisition in a second language. SSLA. 21, pp. 181-193.

Nation, I.S.P. (1990) *Teaching and Learning Vocabulary*, MA: Hainle & Hainle

Nuttall (2005) *Teaching reading skills in a foreign language*, Macmillan, Oxford.

Webb, S. and Nation, P. (2017) *How Vocabulary is Learned*. Oxford: Oxford University Press.

江田すみれ他(2005)「中・上級の学習者に対する短編小説を使った多読授業の実践」『日本語教育』(126), 74-83.

福本亜希 (2004) 「日本語教育における多読の試み」『日本語・日本文化』大阪外国語大学留学生日本語教育センター(30),41-59.

三上京子・原田照子 (2011) 「多読による付随的語彙学習の可能性を探る-日本語版グレイデッド・リーダーを用いた多読の実践と語彙テストの結果から-」『国際交流基金日本語教育紀要』(7), 7-23.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Teiko Nakano and Teruko Harada	4. 巻 -
2. 論文標題 Reading Behaviors of Japanese Learners Based on Logs Recorded by Users of Digital Books	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Eleventh International Conference on Mobile, Hybrid, and On-line Learning eLML2019	6. 最初と最後の頁 4-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野てい子・原田照子・三上京子	4. 巻 29
2. 論文標題 学習者が楽しく多読ができる読み物のレベルとは－多読のための語彙レベルテストの判定結果と読書記録の分析から－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 105-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野てい子	4. 巻 33
2. 論文標題 多読のためのオンライン語彙レベルテスト：適切なレベル選択の一助として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 尚美学園大学芸術情報研究	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中野てい子・原田照子・三上京子・山形美保子
2. 発表標題 多読を始める学習者のための語彙レベル判定テスト 試行版の構築
3. 学会等名 CASTEL-J第8回国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野てい子・原田照子・三上京子・山形美保子・酒井眞智子・宮崎妙子・草野宗子・今井美登里
2. 発表標題 多読のための語彙レベル判定テスト：教室内外の学習者の支援の一助として
3. 学会等名 第11回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ11）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

多読のための語彙レベルテスト http://jgrpg-sakura.com/level_test/ さくら多読ラボ http://jgrpg-sakura.com 日本語グレイデッド・リーダー語彙レベルチェッカー http://jgrpg-sakura.com/level_checker/JGRChecker6.3.php
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------